三つの検証に対する所感

２０２３、１、１６

高橋　新一

●福島第一原子力発電所事故の検証

項目１：地震対策①について

〇緊急時対策所の設備（免振重要棟）

・福島第一原発の事故時に重要な役割をはたしたが、その教訓から柏崎刈羽原発敷地内に建設された免振重要棟は、新規制基準に合わず使用不可となったままである

・代替施設として対策所を５号機建屋内に設置している

・重要棟と同じく防潮堤も地震に耐えられないとされている

・再稼働を仮に目指すなら「免振重要棟」と「防潮堤」ついては、早急に対応策（建て替え）を実施するべきである

〇１号機非常用復水器の議論を踏まえた対応について

・事故時の地震動は、基準地震動を下回ったが、地震動による配管等の損傷の可能性が否定できないことから配管等の耐震性について慎重に確認すること…と指摘されている

・事故当初から東電、一部の科学者、技術者は、事故原因のすべてを「津波（想定外の）」が原因と主張していた

・中越沖地震では基準地震動を大幅に超える揺れが観測された。柏崎刈羽原発でも改めて配管等の耐震性について、改めて確認する必要があるのではないか

項目２：津波対策①について

・電源盤、ポンプ、非常用電源の配置について、津波以外も考慮することとなっているが、今後は、航空機、ミサイル攻撃についても重要な課題ととらえるべきである

・防潮堤については、項目１に記載した

項目９：新たに判明したリスク②について

・残余のリスクへの対応が指摘され、様々な対策を施しても事故は起こりえるというのが事故の教訓と指摘している

・中越沖地震では「佐渡海盆東縁断層」について技術委員会において当時の委員長が「今後の知見にゆだねる」として、両論併記で取りまとめているが、ポンプモーターケーシングの問題等多くの課題がうやむやにされている

項目１０：原子力安全の取り組みや考え方について

・県の原発政策に関して現体制は、かつてなく政権寄りと感じられる

・福島第一事故の教訓を踏まえるなら県民の安全を第一とするのが当然であり、業界、政府与党、商工会議所等々の圧力を跳ね返し、県としての考え方を示すことが重要である

●福島第一原発事故を踏まえた原子力災害時の安全な避難方法の検証

◇県がまとめた「検証報告書の概要」の検証の目的等（スライド・P1)の文章中で……

・「県広域避難計画」について検証を行い、安全に避難するための課題等を抽出・整理…と記載されているが平成２９年８月設置以来「課題等を抽出・整理」の域を出ておらず何ら進歩、具体的な実効性は確認されていない

・国、市町村、関係機関とも連携し取り組みを進め、広域避難計画の「実効性を高めていく」と記載されているが、再稼働問題が取りざたされている現段階で実効性（被ばくしないで全住民が安全に避難）への道筋が全く見えていない

・実効性のある避難計画の策定は、永遠に不可能であることを認識するべきである

・再稼働ありきで、避難計画後回しは、絶対にあってはならない

○５（本文 P11）屋内退避及び段階的避難について

・屋内退避を望まず、自主避難する者が一定程度存在すと記載されている

・PAZ 住民の避難が完了してから UPZ が避難開始またはプルームの流れによっては、屋内退避することとなっているが、PAZ 住民避難が終わるまで UPZ 住民は避難させない。さらに屋内退避を強要させる計画はあり得ない。

・心情として PAZ と同時に UPZ 住民も避難したいと思うのが普通の心理であり「屋内退避」は、交通渋滞等により円滑な住民避難は、不可能でありそのための言い逃れと言わざるを得ない内容である

○６　要配慮者の避難・防護措置について

・福祉施設、医療機関の入院患者の避難に必要な車両や人員の確保について報告されているが、福島第一原発事故時の双葉病院のような悲劇を考えるとき適切な避難は不可能であり、この課題一つをとっても実効性のある避難計画策定は、手詰まりと言える

○８　PAZ・UPZ 内の住民の避難・防護措置（避難車両）……について

・福島第一原発事故時に発災から１０日たってもガソリンスタンドには長蛇の列だった、新潟県内でも一人１０リットルしか給油できない状態が数日続いた

・本年１月１８日からの豪雪時には、灯油、レギュラーガソリンが買えなかった。

○９　テロリズムと避難　について

・陸上、海上からのテロリスト対策は、施されているが航空機、ミサイルによる攻撃については全くの無防備である

・国民保護そのものは、国が実施すべきことであり、県や本委員会の所管外であると記述されている

・現時点でテロリスト対策は、最も重要、喫緊の課題だ。このことに対する対策が十分に整わない限り再稼働の是非はおろか原発（世界最大級）の存在していることさえも恐怖であることを肝に命じるべきである

●福島第一原発事故による避難生活への影響に関する検証

○感想

・事故から１１年経過した現在も事故の悲劇は続いており、いまだ先行きの見えない人たちが大勢いる

・ふるさとを失うことの苦しみは想像に難くない

・運よく帰還できたとしても放射線被ばくの恐怖は、永久に続く

・二度と同じことを繰り返してはならない

・技術委員会のまとめの中に「残余のリスク」がうたわれている。だとするならすべての原発を廃炉にし、原発（核）のない安心・安全な社会に戻す努力が必要

・このような悲惨な事故を経験しながら、いまだに原発に頼ろうとすることは「犯罪」と言わざるを得ない

以上